

よいこのおとぎばなし

もくじ

- 一 猿かに合戦
- 二 シンデレラ
- 三 美女と野獣
- 四 浦島太郎
- 五 マッチ売りの少女
- 六 はだかの王さま
- 七 走らないメロス
- 八 ヨハネの黙示録 確変篇
- 九 草枕
- 十 七ひきのこやぎ
- 十一 しらゆきひめ
- 十二 さんびきのこぶた

猿かに合戦

○

秋の夕暮れだった。

猿は柿を持って帰る途中だった。

角を曲がったところで、取り囲まれた。

加能ガニー杯と、子がに二十杯だった。

「おい」と加能ガニが言った。「その柿、よこせ」

猿は断った。

断った瞬間、足元に昆布が撒かれた。

滑った。倒れた。

上から臼が落ちてきた。

動けなくなった。

蜂が刺した。昆布が巻きついた。子がにが二十杯、全員で挟んだ。

栗が火の中から飛んできて、顔を焼いた。

所持金を全部取られた。

加能ガニが去り際に言った。

「また来い。毎回恵んでやる」

笑い声が遠ざかった。

猿は地面に転がったまま、しばらく動けなかった。

空が暗くなった。

生きていた。

それだけだった。

○

冬の間、猿は読んだ。

五輪の書。地・水・火・風・空。

繰り返し読んだ。

春になっても読んだ。

夏になって、読み終えた。

秋になった。

○

夜明け前、猿は山を下りた。

持っているのは三つだった。

火縄銃。蛇槍（じゃやり）。日本刀。

苦勞して手に入れた蛇槍だった。この日のために徹底して手入れしていた。六・三メートル。

馬が一頭、後ろにいた。

生きて帰るつもりはなかった。

帰れたらそれでよかった。

○

加能ガニの家は川沿いにあった。

夜明けの霧の中に、輪郭が見えた。

猿は木の陰に伏せた。

火縄銃の筒先を向けた。

栗が、家の前の石の上にいた。

朝の空気を吸っていた。

引き金を引いた。

銃声が山に響いた。

栗は動かなくなった。

○

銃声で家の中が騒いだ。

声がした。足音がした。

猿は馬に跨った。

槍を構えた。

奇声を上げた。

馬が走り出した。

○

子にAが飛び出してきた。

馬の前脚が蹴った。

子にAは飛んだ。着地しなかった。

子にBが横から来た。

後脚で踏んだ。

子にCとDが並んで来た。

馬が走り抜けた。二杯とも下に消えた。

子にEが槍の穂先に気づかずに突っ込んできた。

子にFGHが後ろから回り込んだ。

馬が旋回した。三杯まとめて蹄の下になった。

子にIJKが遠巻きに様子を見ていた。

猿は槍を横に薙いだ。

三杯が宙を舞った。

子にLMNOPが散開した。

馬を走らせた。一杯ずつ踏んだ。五杯全員踏んだ。

子にQRが家の陰に隠れた。

猿は馬を止めた。降りた。

家の裏に回った。

QとRが背中を向けていた。

槍で突いた。二杯まとめて。

子にSが屋根の上にいた。

猿は槍を投げた。

Sは落ちた。

子がにTが残っていた。

遠くで立っていた。動かなかった。

猿はTを見た。

Tは逃げなかった。

猿が目の前まで来た。

Tは目を閉じた。

猿は槍を突いた。

子がに二十杯、全員いなくなった。

○

昆布が来た。

足元に巻きつこうとした。

猿は槍を下ろした。

真っ二つにした。

蜂が来た。

猿は槍を水平にした。

真っ二つにした。

○

臼が屋根の上にいた。

上から飛んできた。

猿は横に一步ずれた。

臼は地面を叩いた。

猿は槍を突き刺した。

臼を引きずって川へ歩いた。

川に投げ込んだ。

臼は流れていった。

二度と戻ってこなかった。

○

猿は家の周りを歩いた。

腰の袋からごま油を撒いた。

一周撒いた。

火をつけた。

炎が上がった。

○

日本刀を抜いた。

家の戸を開けた。

中に入った。

○

家の外観が見えた。

炎が上がっていた。

風がなかった。

静かだった。

中から声がした。

一声だった。

それだけだった。

○

家が燃えた。

朝の光の中で燃えた。

川の水が光っていた。

鳥が一羽、遠くを飛んでいた。

おしまい。

シンデレラ

○

継母は今日も謝っていた。

「シンデレラ様、昨日の夕食の塩加減が一」

「多かった」とシンデレラは言った。「わかってる」

「申し訳ございません」

「次から気をつけて」

シンデレラは馬車の手入れをしながら言った。

立派な馬車だった。白い馬が二頭ついていて、シンデレラが自分で買ったものだった。

継母は床を磨いていた。磨き方が足りないと言われると、また最初からやり直した。

義理の姉二人は庭の草むしりをしていた。手が荒れていた。文句は言わなかった。言えなかった。

○

春になった。

王宮から知らせが来た。舞踏会を開くという。

継母がおずおずと言った。

「シンデレラ様、舞踏会の招待状が一」

「行く」とシンデレラは言った。

「ドレスの準備が一」

「着る」

義理の姉たちのドレスを、シンデレラは黙って一枚選んだ。

一番いいやつだった。

義理の姉が何か言いかけた。

シンデレラは振り返らなかった。

○

当日、シンデレラは自分の馬車で出発した。

時間はたっぷりあった。

夜中の十二時という概念は、シンデレラには関係なかった。馬車は自分のものだったから。

会場に入った。

広間は明るかった。音楽が流れていた。人が大勢いた。

シンデレラが一番いい場所に立った。

誰かが飲み物を持ってくるのを待った。

持ってきた人間に「これじゃない」と言った。

別の人間が持ってきた。

「まあいい」と言って受け取った。

○

王子が来た。

広間を歩いていた。招待客に挨拶をしていた。

シンデレラの前で立ち止まった。

「お名前は」と王子は言った。

「シンデレラ」とシンデレラは言った。

「どちらからいらっしゃいましたか」

「近く」

「……そうですか」

王子は少し間を置いた。

「今夜は楽しんでいただけていますか」

「まあまあ」とシンデレラは言った。「飲み物が今ひとつだったけど」

「……申し訳ございません」

「あなたが謝ることじゃないけど」

王子はまた少し間を置いた。

「では、踊りを一」

「疲れてるから」とシンデレラは言った。「後で」

王子は黙った。

しばらくして、別の方向に歩いていった。

○

夜が更けた。

王子はシンデレラを三度避けた。

シンデレラは気づかなかった。

四度目に廊下で鉢合わせた。

「あの」と王子は言った。

「何」

「少し、外の空気を一」

「私も行く」とシンデレラは言った。

「……いえ、一人で一」

「遠慮しなくていい」

王子は城の外に出た。

シンデレラもついてきた。

庭園を歩いた。

シンデレラもついてきた。

噴水の前まで来た。

シンデレラが噴水の水に指を入れた。

「冷たい」と言った。

「……そうですね」

「もっと温かくできないの」

「噴水は一」

「できないならいい」

王子は噴水を見た。

逃げ場がなかった。

○

城の裏口のあたりで、王子はようやく一人になった。

厩の近くだった。

薄暗かった。

女が一人、石の上に座っていた。

汚れた服を着ていた。疲れた顔をしていた。でも静かだった。

「こんな場所で何を」と王子は言った。

女は顔を上げた。

「姉が舞踏会に行ったので、留守番をしています」

「舞踏会に来なかったのですか」

「ドレスを持っていかれたので」

王子は少し黙った。

「寒くないですか」

「少し」

王子は上着を脱いだ。

女は受け取らなかった。

「それはあなたのものです」

「今はあなたに必要そうなので」

少し間があった。

女は受け取った。

○

二人は厩の前でしばらく話した。

馬の話をした。

それから星の話をした。

それから特に何の話もしなかった。

それでよかった。

○

シンデレラは夜中の二時に自分の馬車で帰った。

ガラスの靴は脱げなかった。

自分のサイズに合った靴を履いていたから。

○

翌朝、王子は城の裏口に行った。

女はいなかった。

石の上に、上着が畳んで置いてあった。

王子は上着を持って帰った。

○

一週間後、王子は義理の姉を見つけた。

探すのはそれほど難しくなかった。

女は庭で草むしりをしていた。

王子を見て、立ち上がった。

「上着を返しに行こうと思っていたのですが」

「もう持っています」と王子は言った。

「そうですか。良かった」

少し間があった。

「よければ」と王子は言った。「もう少し話しませんか」

女は手の泥を服で拭いた。

「こんな格好で」

「構いません」

女は少し考えた。

「では少しだけ」

○

継母は今日も謝っていた。

義理の姉の姿が見えないので、シンデレラは少し不満だった。

でも特に何も言わなかった。

代わりに継母に草むしりをさせた。

継母は黙ってやった。

シンデレラは馬車の手入れをしながら、舞踏会のことを少し思い出した。

まあまあだった、と思った。

飲み物が今ひとつだったけど。

おしまい。

美女と野獣

○

お姫様は美しかった。

顔が良かった。スタイルが良かった。声が良かった。

それだけだった。

他に取り柄はなかった。

男と遊ぶのが好きだった。一人に飽きたら次の男に移った。次に飽きたらその次に移った。飽きるのが早かった。城の中だけでは足りなくなった。城の外にも出た。村にも出た。隣国にも出た。

神様が見ていた。

しばらく見ていた。

それからため息をついた。

「もうええわ」

お姫様は能登もち雌豚になった。

○

雌豚になって最初に思ったのは、においだった。

能登もち雌豚のにおいがした。自分のにおいがした。

次に思ったのは、腹が減ったということだった。

次に思ったのは、明日食べられるかもしれないということだった。

前の二つより、三つ目が一番怖かった。

○

豚小屋から逃げた。

野原を走った。森に入った。

森の中で、キノコを見つけた。

腹が減っていたので食べた。

悪くなかった。

次の日も走った。川を渡った。別の村に入った。

ゴミ捨て場に野菜の切れ端があった。

食べた。

悪くなかった。

それどころか、組み合わせが気になった。

昨日のキノコと、この野菜の切れ端と一緒に食べたらどうなるか。

試した。

良かった。

○

それから雌豚は料理を始めた。

道具はなかった。火も最初はなかった。

石を使った。葉っぱを使った。雨水を使った。

失敗した。何度も失敗した。

食べられそうになったことも何度かあった。そのたびに逃げた。

逃げながら、次は何と何を組み合わせるか考えた。

考えているときは、食べられる恐怖を忘れた。

○

季節が変わった。

雌豚は森の奥に小屋を作った。

火の起こし方を覚えた。土器の作り方を覚えた。

スープを作った。

焼いた。蒸した。干した。漬けた。

誰も食べてくれなかった。豚だから。

一人で食べた。

悪くなかった。いや、良かった。

でも誰かに食べさせたかった。

理由はわからなかった。ただそう思った。

○

ある秋の夕方、森の入口に人影があった。

老人だった。

八十歳を超えているように見えた。服がぼろぼろだった。髪が白くて長くて汚かった。においがした。

雌豚より、においがした。

老人は立ってられないようだった。木に寄りかかっていた。腹が減っている顔だった。

雌豚はしばらく見ていた。

豚だから、話しかけることができなかった。

老人が倒れそうになった。

雌豚は小屋に走って戻った。

その日作ったスープを、葉っぱで作った器に入れて、老人の前に置いた。

老人は少し目を開けた。

器を見た。

雌豚を見た。

「……豚が、料理を」

老人はスープを飲んだ。

一口飲んで、止まった。

もう一口飲んだ。

また止まった。

それから全部飲んだ。

老人は少し黙っていた。

「もう一杯、もらえるか」

○

雌豚は次の日もスープを作った。

老人はまた来た。

その次の日も来た。

老人は毎日来た。

雌豚は毎日作った。

老人は何も言わなかった。ただ食べた。食べ終わるといなくなった。

ある日、老人が言った。

「お前は、なんでこんなに旨いものが作れる」

雌豚は答えられなかった。豚だから。

老人はしばらく考えていた。

「食べられたくなかったからか」

雌豚は何も言わなかった。

老人は続けた。

「俺も、似たようなもんだ」

○

ある晩、老人が言った。

「俺はもともと二十歳だった」

雌豚は聞いていた。

「会社をいくつも持っていた。ロケットを飛ばした。電気自動車を作った。SNSを買った。金は使い切れないほどあった。女がいた。次々といた。飽きたら次に行った。それだけのことだった」

老人は手を見た。

しわだらけの手だった。

「神様が見ていた。ある朝起きたら八十三歳になっていた。金も会社も消えていた。女たちは誰も来なかった。当たり前だ」

雌豚は聞いていた。

「六十年分、一気に老いた。でも死なせてもらえなかった。歩き続けた。腹が減り続けた。お前のスープを飲むまで、旨いと思ったことが一度もなかった」

○

翌朝、雌豚は今まで作った中で一番良いものを作ろうと思った。

森で一番良いキノコを選んだ。川で一番良い水を汲んだ。秋の実を集めた。根を掘った。

半日かけて作った。

老人の前に置いた。

老人は食べた。

最初の一口で、何かが変わった。

老人の手のしわが、少し薄くなった気がした。

二口目で、髪が少し短くなった気がした。

老人は黙って全部食べた。

食べ終わって、顔を上げた。

二十代の顔だった。

きれいな顔だった。

途方もない富を持ち、最先端のテクノロジーで世界を動かしていた男の顔だった。

○

男が雌豚を見た。

雌豚は自分の前足を見た。

前足ではなかった。

手だった。

人間の手だった。

鏡がなかったので顔はわからなかった。でも手が人間だった。足も人間だった。

二人はしばらく黙っていた。

「お前が作ったのか」と男は言った。

「そうだ」とお姫様は言った。

声が出た。

「なんで料理を」

「食べられたくなかった」

男はしばらく考えた。

「俺はなんで食べに来たんだろう」

「腹が減っていたからだろう」

「そうだな」

○

二人はしばらく森の中に座っていた。

男が言った。

「これからどうする」

「さあ」とお姫様は言った。

「城に戻るか」

「戻ってどうする」

「さあ」と男は言った。

風が吹いた。

森のにおいがした。

お姫様は立ち上がった。

「もう一品作る」

「また食うのか」

「食べてみたい組み合わせがある」

男は少し考えた。

「俺も手伝う」

「料理できるのか」

「できない」

「じゃあ火を起こしておいて」

「わかった」

○

火が安定してきたころ、男が言った。

「春になったら山を降りて、二人で暮らそう」

お姫様は少し間を置いた。

「嬉しい」

男が立ち上がった。

足を滑らせた。

崖下へ消えた。

○

お姫様はしばらく崖の縁を見ていた。

それから火に戻った。

鍋がぐつぐつしていた。

おしまい。

浦島太郎

○

浜辺で亀をいじめていた。

特に理由はなかった。暇だったから。

子供が三人、通りかかった。

「やめてください」と子供が言った。

浦島は子供を見た。

子供を暴行した。

三人とも倒れた。

亀が海に逃げた。

○

竜宮警察が来たのは翌朝だった。

のどぐろ警部が手錠をかけた。

「浦島太郎、亀への暴行および未成年者三名への傷害罪で逮捕する」

「亀は生き物じゃないのか」

「当管轄では亀は保護対象だ」

浦島は連行された。

○

竜宮刑務所は海の底にあった。

受付は能登牛だった。

「名前」

「浦島太郎」

「罪状」

「暴行と傷害」

「所持品を預ける。ポケットの中身も全部」

浦島はポケットを空にした。

玉手瓶が一本出てきた。

「これは？」

「知らない。気づいたらあった」

能登牛が瓶を袋に入れた。

「没収ではなく預かり。出所時に返却する」

浦島は独房に入った。

○

刑務所の職員は全員食材だった。

看守はがすえびだった。

医務室はのどぐろだった。

食堂の担当は能登牡蠣だった。

図書室の管理は能登ブリだった。

所長室には「能登フグ様」と表札があった。

所長は男だった。

○

三年が経った。

模範囚だった。

刑期満了の朝、能登フグ様に呼ばれた。

「浦島太郎」

「はい」

「反省はしているか」

「しています」

「どこを反省している」

「子供を暴行したことです」

「亀は？」

浦島は少し間を置いた。

「亀も」

「順番が逆だ」

浦島は黙った。

「まあいい」と能登フグ様は言った。「出所だ。預かり物を返す」

玉手瓶が戻ってきた。

「開けるなよ」と能登フグ様は言った。

「なぜですか」

「ろくなことにならない」

「わかりました」

浦島は瓶をポケットに入れた。

○

海面に出た。

浜辺に上がった。

千里浜だった。

砂が固かった。波が静かだった。

車が走っていた。

浜辺を走っていた。

砂の上を車が走っていた。

浦島は車を見た。

見たことのある車と、見たことのない車が混じっていた。

見たことのない車の形が、知っている形と少し違った。

浦島は近くにいた男に聞いた。

「今、何年ですか」

「昭和五十九年だが」

男は不思議そうな顔で行ってしまった。

○

浦島は浜辺を歩いた。

いじめた亀は見つからなかった。

暴行した子供たちも見つからなかった。

当たり前だった。三年ではなく、もっと長い時間が経っていた。

子供たちは今頃、大人になっている。

浦島は砂の上に座った。

波が来た。引いた。また来た。

ポケットの玉手瓶が、温かくなった。

それから、爆発した。

音はなかった。

ただ、白い煙が出た。

○

砂浜に三歳の子供が座っていた。

車が走っていた。

波が来た。

引いた。

「なんだったんだ」

おしまい。

マッチ売りの少女

○

大晦日の夜だった。

女の子はマッチを売っていた。

売れなかった。

寒かった。

マッチを一本、擦った。

○

隣を歩いていた男が止まった。

立ったまま動かなくなった。

目が開いていた。

でも、見ていなかった。

口が少し開いた。

何かを言おうとしていた。

言えなかった。

マッチの火が消えた。

男は首を振った。

早足で行ってしまった。

○

女の子はもう一本、擦った。

○

向かいのパン屋の主人が、ショーウィンドウを磨いていた。

布を持ったまま止まった。

ショーウィンドウに顔を押しつけた。

中は何もなかった。

閉店後で、棚は空だった。

主人は何かを見ていた。

涙が出た。

マッチの火が消えた。

主人は布を落とした。

しばらくその場に立っていた。

それから布を拾って、店に入ってしまった。

翌朝、主人は開店しなかった。

○

女の子は三本目を擦った。

○

荷車を引いていたロバが止まった。

荷車の主人が気づかずに引き続けた。

ロバは動かなかった。

主人は引いた。

ロバは四本の脚を踏ん張った。

主人は怒鳴った。

ロバは怒鳴られても動かなかった。

前を向いたまま、動かなかった。

何かを見ていた。

主人が手綱を強く引いた。

ロバは振り返った。

後ろ脚で蹴った。

主人は飛んだ。

荷車が壁に突っ込んだ。

ロバは暴れた。

荷物が散乱した。

人が集まってきた。

マッチの火が消えた。

ロバは止まった。

荷車の主人は雪の中に座っていた。

何が起きたかわからない顔だった。

ロバは何も言わなかった。

ロバなので。

○

通りを走っていた子供が転んだ。

起き上がらなかった。

泣かなかった。

地面に座ったまま、上を見ていた。

母親が駆け寄った。

「どこか痛い？」

子供は答えなかった。

見ていた。

空を見ていた。

雪が降り始めていた。

雪を見ていた。

母親が揺さぶった。

子供はゆっくり瞬きした。

「なんか、いた」

「何が？」

「知らない」

子供は立ち上がって走り出した。

四本目のマッチが消えた。

○

女の子は手が温まっていた。

マッチが減っていた。

売れてはいなかった。

○

五本目から先は、夜が深くなるにつれて速くなった。

通りを歩く人が次々と止まった。

泣く人がいた。

笑う人がいた。

その場に座り込む人がいた。

何かに向かって手を伸ばす人がいた。

届かなかった。

走り出す人がいた。

どこへ向かっているかわからない走り方だった。

叫ぶ人がいた。

言葉になっていなかった。

全員、マッチが消えると我に返った。

全員、足早に去っていった。

誰も女の子を見なかった。

○

夜が深くなった。

通りに人がいなくなった。

百七本のマッチが燃えかすになっていた。

一本残っていた。

女の子は最後の一本を擦った。

○

暖かかった。

明るかった。

大きなストーブがあった。

ごちそうがあった。

おばあさんがいた。

女の子の知っているおばあさんだった。

おばあさんは笑っていた。

女の子も笑った。

マッチの火が消えた。

○

暗かった。

寒かった。

マッチの箱が空だった。

女の子は笑ったままだった。

雪が積もっていった。

○

男が来た。

いつからそこにいたのかわからなかった。

立派な身なりだった。

雪の中に立っていた。

寒そうではなかった。

男は女の子を見た。

しばらく見ていた。

それからしゃがんだ。

「こんなところに、こんなかわいらしい子が」

男は言った。

「こんな夜に、一人でいてはいけない」

女の子は笑ったままだった。

「あなたは、誰？」

女の子が言った。

「闇源氏という」

男は答えた。

「あなたは？」

女の子は答えなかった。

笑ったままだった。

男は続けた。

「私が育てよう。理想の女性に」

女の子は何も言わなかった。

男は女の子を抱き上げた。

軽かった。

女の子はまだ笑っていた。

男は歩き出した。

雪が降っていた。

静かだった。

○

元日の朝、女の子がいた場所に、燃えかすが散らばっていた。

数えたら百八本あった。

女の子はいなかった。

どこへ行ったかは、誰も知らなかった。

○

翌年から、その通りではマッチの行商が禁止された。

理由は「近隣住民への影響」だった。

詳しくは書かれていなかった。

おしまい。

マッチあそび、ダメ、ぜったい。

はだかの王さま

○

王さまは演説しようと思った。

城の外へ出た。

家臣が全員いた。

全員にモザイクがかかっていた。

おしまい。

ひとにしか みえないふくを かうまえに よくかんがえて かねつかえ

走らないメロス

○

メロスは激怒しなかった。

面倒くさかった。

○

王城に連れていかれた。

王に会った。

王は言った。

「お前を処刑する」

メロスは言った。

「三日待ってくれ。妹の結婚式がある」

王は言った。

「人質を置いていけ」

メロスは親友セリヌンティウスを呼んだ。

セリヌンティウスは来なかった。

女といた。

メロスは仕方なく自分が残った。

○

牢屋に入った。

三日あった。

することがなかった。

○

一日目。

看守が食事を持ってきた。

メロスは食べながら言った。

「三日後に処刑が終わったら、故郷に帰るつもりだ」

看守は黙った。

メロスは続けた。

「母が待っている」

看守がそっと目を逸らした。

メロスは気づかなかった。

○

二日目。

セリヌンティウスが面会に来た。

「すまなかった」

「いい」とメロスは言った。

「お前が来なかったから俺が残ることになった」

「本当にすまなかった」

「妹の結婚式には出られそうか」

「出られる」

「よかった」とメロスは言った。「俺も出る。処刑が終わったら一緒に行こう」

セリヌンティウスが何か言いかけた。

言わなかった。

「お前に借りた金も返す」とメロスは言った。

セリヌンティウスは帰った。

走って帰った。

○

三日目。

処刑台に連れていかれた。

王が見ていた。

メロスは王を見た。

「王を信じさせてみせる」とメロスは言った。

誰にともなく言った。

処刑人が困った顔をした。

○

その瞬間だった。

空が曇った。

雷が鳴った。

処刑人が滑った。

縄が切れた。

王が転んだ。

メロスは立っていた。

○

王は地面から顔を上げてメロスを見た。

しばらく見ていた。

「信じよう」と王は言った。

理由は言わなかった。

メロスも聞かなかった。

○

セリヌンティウスが迎えに来た。

女も一緒に来た。

三人で故郷に帰った。

母がいた。

妹の結婚式があった。

借金は帰り道に返した。

全部終わった。

○

後から数えたら死亡フラグが五本あった。

全部回収されなかった。

霧島流奥義・死相砕きだった。

おしまい。

フラグは、立てた数だけ、帰れる。

ヨハネの黙示録 確変篇

○

我は見た。

第一の封印が開かれた。

轟音が鳴り響いた。

光が溢れた。

玉が解き放たれた。

数を数えることができなかった。

○

第二の封印が開かれた。

さらに大いなる光が降り注いだ。

玉は川のごとく流れ、床に満ちた。

隣の者が振り返った。

目が合った。

何も言わなかった。

○

第三の封印が開かれた。

天使が告げた。

「これは始まりに過ぎない」

我は震えた。

玉は止まらなかった。

○

第四の封印が開かれた。

私の箱に枚数を数えることのできない硬貨が満ちた。

我は泣いた。

理由はわからなかった。

○

第五の封印が開かれた。

光はさらに激しくなった。

音はさらに大きくなった。

周囲の者たちが立ち上がった。

我也立ち上がった。

○

第六の封印が開かれた。

解放は最高潮に達した。

玉と硬貨は山をなした。

我は両手を広げた。

受け止めきれなかった。

○

第七の封印が開かれた。

天地が静まった。

光が消えた。

音が消えた。

元に戻った。

我の手には何も残っていなかった。

おしまい。

その数は、九九九であった。

草枕

○

Xを炎上させながら、こう考えた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

おしまい。

すみにくい。

七ひきのこやぎ

○

お母さんやぎは森へ出かけた。

出かける前に子やぎたちを集めて言った。

「オオカミが来ても絶対に開けてはいけない。合言葉を聞きなさい。答えられなかったら開けてはいけない」

「合言葉は？」と子やぎたちが聞いた。

「金沢城ができる前の城の名前は何？」

子やぎたちは頷いた。

お母さんやぎは森へ入った。

帰ってこなかった。

理由は誰も知らなかった。

○

オオカミが来た。

「お母さんですよ。開けなさい」

「合言葉は？」と子やぎたちが言った。

オオカミは黙った。

しばらく黙った。

帰った。

○

オオカミは声を変えて戻ってきた。

「お母さんですよ。開けなさい」

「合言葉は？」

オオカミはまた黙った。

帰った。

○

オオカミは三回目に来た。

「合言葉は？」

「……尾山神社」

子やぎたちは顔を見合わせた。

火縄銃を構えた。

槍を持った。

石を握った。

熱湯を用意した。

蜂の巣を持った。

臼を構えた。

唐辛子を握った。

扉を開けた。

オオカミが入ってきた。

七匹が迎撃した。

オオカミは帰れなかった。

○

片付けが終わった頃、扉をノックする音がした。

「どちら様ですか」

「赤ずきんと申します。つまらないものですが」

「合言葉は？」

「尾山御坊」と赤ずきんは即答した。

「尾山御坊は」と赤ずきんは言った。「かつて加賀国に存在した浄土真宗の寺院です。加賀一向一揆の拠点であり、石垣や堀を巡らせた一大軍事要塞でした。1580年に織田信長の軍勢に攻め落とされた後、その跡地に築かれたのが現在の金沢城です。創建は1546年、本願寺によって金沢御堂として建立されました。当時は百姓の持ちたる国と呼ばれた加賀国において、一向一揆の政治・軍事の中枢として機能していました。大阪の石山本願寺と同様に、周

囲に空堀や柵、石垣などを備えた実質的な城でした。1580年、織田信長の命を受けた佐久間盛政が攻略し、城郭化して金沢城と命名しました。1583年、賤ヶ岳の戦いで盛政が敗北した後、前田利家が城主となりました。利家は城を大幅に拡張・改修し、現在の金沢城の礎を築きました」

子やぎたちは黙って聞いていた。

扉を開けた。

赤いずきんをかぶった女の子が立っていた。

風呂敷を持っていた。

「森八の羊羹です」

羊羹を受け取った。

「お母さんへのお届けものだったんですが」と赤ずきんは言った。「森で会いまして。こちらへ持っていくように言われました」

子やぎたちは黙った。

「どうかされましたか？」

「いいえ」と一番上の子やぎが言った。

「そうですか。では」

赤ずきんは帰った。

子やぎたちは羊羹を切った。

七匹で食べた。

うまかった。

おしまい。

もりへは、きをつけて。

しらゆきひめ

○

お妃は鏡に向かって聞いた。

「この世で一番美しいのは誰？」

鏡は答えた。

「お妃様、あなたです」

九官鳥が叫んだ。

「ハルシネーション！ ハルシネーション！」

お妃は九官鳥を見た。

鏡を見た。

「課金したのに」とお妃は言った。

鏡を叩き割った。

おしまい。

かがみは、ただしいことを、いうとはかぎらない。

さんびきのこぶた

○

三匹の子豚は家を建てることにした。

○

一匹目は藁で建てた。

完成した。

崩れた。

地元の農民が通りかかった。

野焼きに使った。

炎上した。

能登もち豚として、美味しくいただきました。

○

二匹目は木で建てた。

完成した。

オオカミが来た。

「吹き飛ばしてやる」

オオカミが吹いた。

オオカミが吹き飛んだ。

家は無傷だった。

オオカミは帰った。

壁が外側に倒れた。

豚にタライが落ちてきた。

○

三匹目はレンガで建てた。

完成した。

オオカミが来た。

「吹き飛ばしてやる」

オオカミが吹いた。

何も起きなかった。

オオカミはもう一度吹いた。

何も起きなかった。

オオカミは帰った。

豚が外に出た。

上から水が降ってきた。

おしまい。

いえは、しっかりたてよう。たてたあとも、きをつけよう。